

報



會

會 岳 山 本 日

68

月 八 ・ 七 年 二 十 和 昭

ウエストン師の純動

一

去る六月二十三日長き邊に於かせられては名譽會員ウォルター・ウエストン師に對し「國民體育發展上寄與するところ大なるのみならず日英兩國親善に貢獻せる功績顯著なり」として、勳四等瑞寶章贈與の御沙汰があり、ついで七月十六日倫敦我が大使館に於てその傳達式が行はれ、同師は非常なる感激を以つて之を拜受したといふことである。

この機會に於てウエストン師の年來遺せられた功績を一應回顧して、この光榮の幾分でもを多くの人達にお傳へしたいと思ふ。

二

ウエストン師が前後三回來朝し、足かけ十六年に亘る滞日中間中に遺された足跡は茲に繰返すまでもなく、日本アルプスだけでも殆んどその全般に亘つて居り、我々は師の廣汎にして徹底せる態度に先づ注目させられる。殊に跋渉の行はれたる年代、當時に於けるこの山地一帯の交通網・開發狀態、及び社會一般並にその地方民の、山岳に對する無智と無關心などを併せ考へるとき、今日所謂山岳通を以つて自任する人々と恐らく同じ位の、或はそれ以上の廣さ深さに於て、かうした山岳探檢に

從事せられたウエストン師の態度に驚服せざるを得ないのである。

勿論、ウエストン師以前僅かであるが、數名の内外人もこの地を跋渉したが、何れもたいてい二三回に亘る短期間のことであり、ウエストン師の徹底さ廣汎さに比較すべくもない。

そればかりでなく以上の數氏の場合には、或は地質調査、或は地形測量乃至地誌の研究、或は生物研究といふこの山岳地方に對する科學的研究が、跋渉の主目的であり従つてその間に行はれたる登山は附隨的偶然的のもので、山に對する態度もとかく明瞭を缺いた。然るにウエストン師の場合には多少地誌研究の目的があつたにせよ、山に登つて樂まうといふ登山の第一義的目的がクッキリと現はれ、またさういふ明確なる意識と態度を以つて探檢されたといふ點を我々は見逃し得ない。即ち、當時我國に行はれてゐた登山といへば師が方々の山で遭遇して居られた宗教的信仰登山であつて、これと區別された「登山としての登山」といふ近代登山はまだその萌芽さへ現はれ居らず、勿論我國人の間でさへさうした意味の登山をやつてゐた者は一人もなかつた。さうした時代に、ともあれ、前述の如き明確なる登山意識を以つてこの地方を跋渉せられたことは、師が我が近代登山の父といはれ、その第一人者といはれる所以である。

第一回の來朝後著はされた「日本アルプス」はかゝる呼稱を以つて公にせる最初のものでありまた當時のこの山岳地帯を物語る最良の資料として今日尙尊重されるものである。

しかし、ウエストン師のかゝる先蹤者の行動と、その「日本アルプス」とがどの程度に直接に我が國民に訴へる所あつたかは、いつか小島さんの云はれたやうに、残念ながら皆無であつたといはねばならないし、それが直接の動機となつて我が國の近代登山の發祥とはならなかつたにしても、ウエストン師のかうした山に對する純眞なる態度が年を経るに従つて、初めは數名の知人の間から相當の廣い範圍の人々の間に認められ、擴められ理解されて行つて、つひに師の積極的支持の下に日本山岳會の創立となつたことは今更云迄もないことである。この會を創めた我々の先輩達の多くは、多かれ少かれ同師の指導啓發をうけたことは甚大であり、今日尙ほ師が山に於ける我々の父として思慕さるゝ半面も茲にある。

三

しかし、近代登山の父としての功績のみを強調することはウエストン師の功績の半面を忘れたものである。明治年代我が國情を海外に紹介した外國人は外にも少くないけれども、深く我内地に入り山岳地帯を跋渉し、その自然の姿を如實に紹介し

た者は少い。その直接の影響はともかくとするも、實に山、山登りを通じて、我々が今まで見過して来た我國土の美、その大を新たに我々に知らしめ、我が國人の間に祖國の自然に對する關心と愛著とを喚起する上に少からざる寄與貢獻をなされたことは茲に強調しなければならぬ。この新しい風景觀が我々に打ち開かれずして、昔のままの狭い風景觀が今日まで我が國の觀光水準を高めないで居たならば、今日恐らく我々の山河はどんな姿態になつて居たであらう。この時代に於て我々に新しい風景觀を與へられ、そして改めて我國土を見なほす機會を與へられたことを、今日に於て、志賀重昂氏と並べてウエストン師に深く感謝しなければならぬと思ふ。

四

一九一五年、倫敦に定住されて後は、ウエストン師の生活の少からざる部分は日本の紹介に献げられた。當時宛も大戦中の事として、かの國に於ける日本事情探究の欲求が熾烈であり、英國政府も同盟國日本に對する認識の徹底化に努力してゐたがたま／＼歸英された師は間もなく劍橋大學校外講師としてその餘暇の全部をあげて日本の講演に献げられ、英國の各地を遍歴しては、日本並に日本人に對する正當なる知識の普及に努力される所が多かつた。その後十餘年此の方面に於ける師の活動は、

或は講演を通じ、或は文書を通じ、終始一貫變ることなく、身はく遠英國にあり乍ら、心は常に我が風物我が國人を離れることはなかつた。殊に王立地學協會の一員として、事日本に關する限り常に評議に參畫し、殊に滿洲事變當時の如く、英國の朝野の輿論は全く日本を離れたる状態に於ても、一人の日本支持者として敢然起ちて、政界有力者の間に奔走し、或は各地に日本紹介の講演に臨み、我日本の主張の存する所を闡明して憚らなかつたといはれる。

この場合かゝる活動はいつも私的のものであり、その影響もいつも英國一般の民、又は學校生徒の間に深く、從つて我が國人の間に認める所は少かつたのは遺憾であるが、その認めらるゝこと少きを憂えず、専心日本に對する純眞なる献身より出發して、自ら進んでかゝる酬ひなき事業に從はれた所に師の面目躍如たるものがあり、日本の友としての師の存在も確かにこゝにあつたと云はねばならない。

五

大正十四年夏長くも秩父宮殿下がアルプスを登攀遊ばされた際の如きウエストン師は殿下の御登攀につき巨細に亘り御指導申上げ、御服装の製作、御携帶品の注文等自ら出向いて一切を處理し、アルプスに於ける御登攀の準備的訓練、山岳の選擇、順序の決定、山案内の指名に至るま

で一々深く注意を拂つたといふ。

殿下には御恙なく御行程と終えさせられたのは、殿下御自身の御健闘は固よりのことであるが、一つに一人の影の人物の存在があつて、かく萬端遺漏なき準備を整へ申上げたことによるといはれる。老齡にして自ら風從申上げることのできない師は山麓にあつて蔭ながら始終御安泰を祈り申上げて居たといふ。一度殿下の御事に關するとなれば師の思慮行動は些細事と雖も苟もせず、當時近侍せる者は何れも師の謹嚴な武士の如き風格とその忠誠とに感動せしめられたといふことである。

大正天皇陛下の御不例により、殿下には急遽御歸國あらせられたが、殿下を英國山岳會の名譽會員に御推薦の議が起り、全會一致を以つて可決されたが、この提案者はウエストン師その人であり、一に全く御留學半ばにして御歸國の餘儀なきに至りし殿下の御心を幾分なりとも御慰め奉らうとした師の心に出でたものといふことである。

六

ウエストン師は日本を去り倫敦の居を定めてから二十餘年本年を以つて七十七歳「喜」の字の祝の春を迎へられた。傳へ聞く所によれば師は最近その健康を痛く害され、既に一切の公的生活より退き、起居にも不自由を訴へられて居るとの事で、また最近ではウエストン夫人まで重病

の床につかれてゐるといふ事であつた。

日本の友としての師の活動を讃る者は、等しく、我が國のために貢献された師の生涯の廣く正しく我國民の間に認識されることを切望してゐた。師の事業が全く功利的私情又は職業上の事由によるものでなく、信念として終始一貫之に當られたもので、またそれがためその功績が世人の表面に現はれることは少くあつたが、今般鼓動の御沙汰を拜するに至つた次第である。

殊にこの鼓動について記すべきことは恐らく體育關係でかゝる御沙汰を拜したものは日本人としても殆んど前例のないことである。この點ウエストン師としては破格の光榮に浴ものしたと云はねばならない。

我々は、どんな形式でもよい。その位の高下は問はずたゞ我が國民の名に於てウエストン師の功績が公式に表彰せらるゝことをひそかに冀つたのであるが、かゝる有難い御沙汰を拜したことは、ウエストン師としてもたゞゞ感激の外はなかつたに相違ない。この報に接した小島さんは今ま生きて居た甲斐があつたといふやうな感慨を洩されたといふことであるが、それにしてウエストン師自身の喜びは如何ばかりであつたらうと察せられる。

七

この場合我々のウエストン師のた

めに遺憾に耐へず、同情の念を禁じ得ないことがたゞ一つある。長年、山の友として共に山を歩き廻られ、また人生の友として互に人生の苦を共にされたウエストン夫人がこれに先立つてこの世を去られ、この光榮の喜びを領し得る友を失はれてゐたことであり、ウエストン師の心裡は察するに餘りある。

五月の英國山岳會の總會には長くも秩父宮殿下も御臨席遊ばされたやうに洩れ承る。ウエストン師も元氣で御陪席申上げ得るほどに元氣になられたやうであつたが、夫人の急逝以來再び病床につかれて、一人の近視者もなく後嗣もなく淋しく孤獨の身を養はれてゐるやうに傳へられてゐる。會の壽像建設の仕事も着々進んでゐるやうであるが、この際一刻も早く實現させてウエストン師を慰さめて上げたいものと思へるのにはあなから私達ばかりではない。

(黒田)

ウエストン師の壽像建設について

建設委員

本會名譽會員ウォルター・ウエストン師の壽像(胸像浮刻)の建設についてはしばしば新聞紙上に報導されたる處で、會員諸兄もすでによく御承知のことであらうと思ふ。本月初め關係官廳の許可を得たので、十五

日會の事務所にリリーフを飾つて會員諸兄の御高覽に供したわけであるが、右リリーフは本月二十四日、横佐藤の兩名が神河内に出張、おそくとも本月末までには取付けを完了し、この壽像建設の事業は一段落を告げる豫定である。茲に今迄の経過を抄録して、この事業のため會員諸兄の寄せられたる御好意に答へたいと思ふのである。

同師の近況は、會報六十五號に松方君の記された通りであるが、師の病床を見舞ふべく、二三の會員から御見舞の言葉或は品を送つてゐたやうである。しかしこれだけでは師の老後を慰め、我が山岳界に對する年來の貢獻に酬ゆるものとしては、一時的で、小範圍に止まらざるを得なかつた。特に同師の酬ひらるゝ少き過去を顧るとき、我々は、會として何らかの形式で、同師の功績を紀念し永遠に傳へたいといふ氣運が濃くなり、かくして、三月の理事會に正式にこの紀念事業の提案があり、席上、その形式として種々なる計畫も提案されたが、結局最も有意義な方法として、同師の壽像を製作建設し同師の先蹤者の功績を表彰し永遠に記念する方針に決定。滿場異議なくこれを承認した。尙具體的方法として、建設箇所は、同師の最も熱愛された神河内の地を豫定地として選定し、また壽像は華やかな大袈裟なものより、重味のある小じんまりとした浮彫風のもの、ウエストン師の

ために相應はしいといふことに決定した。そして松方、楳、加藤の三氏を實行委員に擧げ、その後の交渉、製作者の選定、建設の様式の決定を委任した。

四月の理事會に於て神河内と關係ある官廳の内意が略々明かになつたこと、壽像は會員の佐藤久一郎氏に依頼し、すでに下繪の製作を取かつてゐること等の経過報告があつた。

浮彫原型は佐藤氏の苦心努力によつて着々と準備され、ウェストン師の若い頃、或は最近の肖像などが方々から集められて原本となり、また直接同師を知つて居られる二三會員の意見なども參酌して早くも六月初め原型の完成を見、十日の理事會に於て、役員の内覽を仰ぎ、原型はそのまゝに承認、直ちにその鑄造に取かゝることになつた。



浮彫師トスエウ・タル・ウ

史編會長史編日 史編十編歴

原型は二尺二寸に一尺七寸の額面の浮彫胸像で、最近の肖像を土臺とし、これだけではひどく老衰されてゐるので、約十年前の面影を加味したといふ佐藤氏の談であり、之を見た者は、ウェストン師を識る者ト否とを問はず、「よくできた」と感嘆久しくしたのであつた。殊に仕事の忙はしい餘暇に、しかもかくまで早く製作された製作者の苦心と好意とを深く感謝して、原物の完成の日を樂んだのである。

次の問題は壽像建設地點の選定であるがなるべく多くの人達の目にふれる所でも自然に露出する岩面を利用し、なるべくそれを傷けないで、嵌入する様式に建設の方針決定その方針の下に六月下旬、この建設の現場を實地檢分のため、楳、中司、黒田及び製作者たる佐藤久一郎氏の四名が神河内に入つた。(この詳細な

報告は別項參照) 清水屋の上流、六澤との間に一つの岩面を發見し、これを建設豫定の候補地と内定、たゞこの地に向ふかされてゐた東京營林局及び松本營林署關係諸員を案内、現地に立會う解を得ることができ、その歸途長野縣廳に立寄り、關係各員を訪ねる解を得ることを得た。七月八日の理事會に、神河内のこの地點に建設することの可否を諮り何れも異議なく承認を得た。そこで直ちに提出書類の作成を取急ぎ、七月十四日には、東京營林局に、上高地保護林内土地使用承認願を、七月十七日には、長野縣土木部へ中部山岳國立公園内工作物新築願を、知事宛學務部へ上高地史蹟名勝及天然記念物指定區域内工作物設置許可申請書を夫々提出した。

壽像は七月末にはカットの如く完成され、八月初め長野縣知事近藤駿介氏の名に於て、工作物設置許可の指令があり、松本營林署長有馬省吾氏の名を以つて土地使用承認の許可が下つた。八月中に壽像取付に着手することにならう。

ともかくとりあえず、今迄の経過を茲に御報告、旁々この仕事のために各方面の寄せられた御好意を茲に關係者の一員として感謝する。

終に除幕式には時節柄華々しいことは差控へてはとの意擧で完成の上でも賑やかなことは一切これを省くことになつたことについて、會員諸兄の御了察願ひたい。(黒田)

岩を求めて

などと書き出すと、やもりに向きさうな岩のブロックを捜したり、或は時節柄金銀脈でも捜しに行くやま師のやうに誤られても、仕方がないでせう。が私達の目的は、ウェストンさんの浮彫をとりつけるによい岩を求しに來たのでそれも穂高や槍などの頂き近くの岩ではなく、なるべく平地に近い所といふ會の注文で神河内に入つたのです。楳、中司、佐藤(久)それに黒田の四人連でこの二十年來、何回となく徳本をこえたり最近では歩かずに運び込まれたわけで、神河内の景觀は頭にこびりついてゐるやうに考へられたのですが、しかし特に岩をさがしにこゝに來たのは今迄になかつたことで、さうした目的を以つて入ることは、私達の生涯にも餘りないことだらうと思ふのです。今迄はたゞ漫然と歩いてゐて、路傍の露岩などに特に注意したことも勿論なく、まして、カツバ橋の傍の岩がどうであつたとか六百の五千尺に突出した岩がよかつたなど、それが山にかゝつてからならともかく、大正池の尻から徳澤までの平にどんな岩があるかなど一々氣を止めたことはありません。そんなわけで平地に岩を求めるといふ一寸矛盾したやうな立場でこんだ神河内に乗込むことになつたのです。

い奴とチエツクして置かうといふので單獨り、こゝに先發しました。上の方から岩を捜すのが順序だと思つて久し振りに徳本をこえるつもりでしたが、相憎く翌朝から降り出した雨に上昇を挫かれて、途中一町程歩いたばかりで遂に神河内にかつぎ上げられて了ひました。あの街道は釜トンネル邊はよくなりましたが當分あのまゝにして、數年後に本格的に改修しやうといふのですが、あの位歩くのも悪くはないことです。しかし改修する位なら根本的にやつて不安を除いて頂きたいものです。

ともあれ、岩さがしといふ一仕事を背負はされて見ると、さうボンヤリと乗つても居られず歩いて居られず、路傍や、樹立に見えかくれする岩角がやたらに目について首のつけねが痛くなりさうです自ら眺めも近視眼的になつて了ひます。

まだシーズンに早いし、雨にたゞられてか、變てこな遊山客の群も居らず、宿は獨占に近い姿でした。ともかく着いた日の半日は中川邊まで梓川に沿つて、次の一日は徳澤まで足を延して、大正池から徳澤までの間で目ぼしいものを五ヶ所ばかりさがし當てました。Aは清水屋の上手百五十米ばかりの所で道が急に左折し、そして道は自ら梓川に沿ふて右へ曲り、そこに小さな橋がかゝつてゐますが、その一寸手前、路の左側に大きな花崗岩が根をはつてゐますそれが第一の岩です。河童橋の附近

には穂高道への入口に小さいのが一つころがつて居る位、Bといふのは五千尺のうらに六百の鼻がのしかゝつて誰にもその岩は印象の深いもので、岩としては最も立派ですが、臺所に近く環境が思はしくないので問題になりません。それから五千尺の水車のかゝつてゐる小川の向側には相當に細かい岩が現はれてゐますが取るに足りません。Cは小梨平から上手へ三百米ばかり行つた所に中川と呼ばれる河が道を横切つて、そこに橋がかゝつてゐます。ちやうど落葉松の自生林への入口です。この橋

は水の出る時には上の方を高廻りさせられるので御承知かと思ひますがこの橋の右側に相當な奴が出てゐます。岩としても少し凹凸が多いやうですが立派なもので、こゝにはめ込めば、像は恰度左向ですから、それにあの落葉松があれ以上のびなければ、ウエストンさんに縁故の深い明神岳がそれをこして眺められるといふ最もふきはしい所と思はれましたそれから上流になると、牛小屋（吉城屋）の少し手前で、川の真中にヤナギの樹が何かあつて、それを媒介として小さな橋がくの字なりにかゝつてゐる所があります。この橋の左側に相當な奴が露出してゐます。このDの岩は前のCの岩と略々同じやうな環境にあるのですが、Aに比してCと同じやうにひどく風化されてゐるので餘り感心はできませんでした。また徳澤への入口の牧場の櫓

邊り、或はその先にも條件や異にした奴が現はれてゐるやうですが、何れも小規模で取上げる必要はないと考へられました。その外に明神池にはそれこそお眺向の大きな奴がころんでゐるのですが、何分にも神城なので、神様のおたよりがあつてはと遠慮しなければなりません。明神池から穂高道への新道は思つた程明い所ではなく、また手頃な岩も、カツバ橋までに見發見することができませんでした。

この一日中で平らな道は殆んど歩きました、ともかく私個人としてこれはといふ岩をこのやうにさがし、このうちから、A B C Dの四つを適當と選び出したのです。勿論もつと上へ行けば赤澤岩小屋など問題なしの岩もあり、また坊主岩小屋の岩もよいと考へました。特に前者はウエストンさんには印象の深い岩であつたと思ふのです。また後者もよいのですが槍の領域は、蟠龍上人の繩ばりですからこれまた遠慮した方がよからうし、もともとなるべく多くの人達に見て頂きそしてウエストンさんの功績を知つて頂きたいといふ趣旨からすれば、上の方はまづ割愛して思ひ切つて神河内の平に限つたのです。

それからともかく宿に落ちついて、今迄の経過を報告し、晝すぎ、問題の岩を見て廻ることにになりました。天気は夕立気味ですがよく晴れて、今朝崖崩れを懸念して下に降つた四人連の晝家はさぞ松本平で口惜しがつてゐることでせう。

Aの岩で最初にひつかゝつて了ひました。これならよいといふので、一同文句なし、賛成、岩の傾斜角をはかつたり、くま笹をこいで岩の上から巻尺を取出して高さを測つたり木の根子につかまり乍ら巾を測つたり。しばらくは騒ぎでした。郵便屋の自轉車も妙な顔して通りぬけて行く仕末。それに十七枚とれるといふS自慢の手製カメラや近頃手に入つたといふNの九ミリ半が盛に活躍する。こうした珍風景はその後、Bの岩、Cの岩でも演ぜられました。しかし、K得の意の膝の出る牛ズボンには笹につきもののブヨで足がはれたり、結局神河内ではこんな亂暴な風態はよくないといふ事になりました。たのまれもしないのに河童橋の長さが百尺に一寸足りないとか、水面まで何尺だとか下らない事と測つて喜んだのは誰だつたか當てて下さい。また時々ロッスが顔を出して、手近な岩を、観るといひながら、はるか上の穂高の岩や雪にソツト向けられるのも人情です。下生えの態笹をすき通して岩が見えるといふ程のロッスさださうです。こんなノンビリとこゝら邊を歩いたことも久しぶりな四

人ですから大目に見て置いて下さい。そんなわけで、力餅で力をつけるまではないはぶぶん手こずれました。雲行が夕立くさく、宿に置いてきたコーモリや陣笠を持つて来ればよかつたなどと心配する者もありましたが、それから、明神池でいのはなの委にゆびを加へながら休んで、また来た道々、岩を見直しながら戻りました。帝國ホテルの傍を横目にらみながら、山の連中やテントの連中がカスミかゝつた眼や骨ばつた顔で、どんな恰好してホテルの食堂の血にかぶりつくだらうかなどと負け惜しみ云ひながら宿に歸つたのは五時頃でした。そして一風呂浴び乍ら、岩の選定について協議しました。結局AかCか、そして両方とも許可されないとしたら一その事、山の頂き近くにといふことになりました。

結局、私達の最も適當な地點としてはAを選んだわけです。地點は前に申上げましたが、清水屋から梓川の左岸について散歩道をカツバ橋の方へ進むと約百米程で道は急に左に折れ、道の右側はすぐ下を梓川の本流が岸を洗つてゐます。この曲り角に上高地國有林第一一二と第一一三林班の班界木標が白く埋めてあるのは御存じでせう。この曲角から道は山の鼻と梓川とに挟まれて地形なりに自然に右へゆるく曲つて行きそして一つの小橋を渡つて雑木林に入ります。この小川はたしか善六澤から出てゐる一支流で、すぐ上流では清

小屋の電氣を起してゐるのです。この小橋の手前、そして林班木標から約三十米ばかり上流、路の左側に、山の側に見上げるばかりの花崗岩が大池から根を生やして立つてゐます。これが問題の岩ですが、その面は恰度霞澤岳の三本槍を正面に見る見當に當りますから南々西に向いてゐるのでせう。岩は路から一間ばかり引込んでゐます。この邊一帶は下生が態笹です。こんな所にこんな岩があらうとは氣が付きませんでした。たいていの人は霞澤岳か梓川のきれいな流に目を奪はれて了ひますから氣のつかないのも無理はないでせう。

岩は二面ありますが向つて右の奥の方の岩がよいと決めました。この岩の上には岳樺とコマツガが生え、近くにはモミも大分あります。環境としては別に暗いものではありません。岩そのものもしつかりしたもので、大正池の自働車道に見かけるやうな生々しい地面から出立ての岩といふ感じはなく、地衣も相當につき、割目には草や盆栽式の稚樹が附着して岩全體としても實にさびのついた落ちつきのあるものです。岩質も他の場所のやうに風化されて居らず、また細かい凹凸がないだけにリリーフの如き平面のものはめ込みに都合がよいし、高さが二〇尺に巾七尺ですから廣さから云つても、また傾斜面も、八十度位ですから、面の正合から云つても申分なく、もつて来いであらうと思ひました。リリー

フの位置は大體六尺位の高さにし、將來の經歷の板の餘地を考へてこの位がよくないかと考へました。

あの地點ならば、南向きで、上方は大きな樹木で覆はれて居ますから、冬も火して雪の中に埋れる心配はないやうです。管理の點から見ても、人家に近いし、常に人通りのある道ですから安心です。それになるべく一人でも多くの方々にといふ趣旨からも最も適當であると考へたのです。といつて自動車道にむき出しにさらされては居らないし、將來としても自動車から居ながらにして、リリーフを眺めるといふことには萬一にもなさないやうな、散策道に當るのでよいと考へられます。たゞ故意にあの像をスポイルされる危険を考へないわけには行かないのですが、神河内の景觀を保存しやうといふ人であれば、問題はないでせう。しかしさうした危険をも充分に顧慮する必要はあると思つても地藏さんか、観音さんでも收めるやうに穴の中に藏めて観音開きをつけ、見料幾らかをとることにでもすればともかく、そんな眞似もできません。ウエストン橋が出来、ウエストン茶屋のできないやうにすることも考へねばなりません。

先づこの岩を第一の候補地點と我々は選定したのです。また借地願とか何とかいふ手續はして居りません適當な岩を見つけただけの話で、官廳關係でこれを如何に取扱はれるか

これからの問題なのです。

しかし、自分で石屋にならうとか、披露式にはモーニングだらうがそんななりで神河内にくるなんて、考へただけでも痛快でなうて、未だ見ぬ夢を心にえがきつゝ、この四人の連は東京へ歸つて來たのです。我々の會のこの仕事に對して官廳關係の寄せられ御好意、受けた御支持は全く豫想以上のものでした。この機會に改めて御禮を申述べてこの便りを終らうと存じます。

(TK生)

ウエストンと 同時代の一外人登山

行方 沼東

山岳會の創期會員でエー、イー、ウエブといふ英國人の宣教師があつた。今は英國に歸つてマンチエスタに住んでゐられる。私はふとした機縁でウエブさんと交通してゐるが最近同師の日本在住中の登山の記録を同師から送つて貰つた。矢張日本アルプスの開拓時代で當時の詳細な日記があるやうでその熱心な山登りには驚かされる日記から主なるもの摘記されたのを左に記す。

- 一四九四年 駒ヶ岳(信州)
- 一四九五年 富士山(第一回)淺間山
- 一四九六年 八ヶ岳
- 一四九七年 駒ヶ岳、鳳凰山(第一回)富士山(第二回)
- 一四九八年 御岳山、富士山(第三回)

(回)

- 一八九九年 富士山(八合目マデ)
- 一九〇〇年 愛鷹山
- 一九〇三年 妙高山
- 一九〇四年 地藏ヶ岳、鳳凰山(第二回)甲斐ヶ根山、農島山

- 一九〇五年 富士山(第四回)
- 一九〇七年 乗鞍岳
- 一九〇九年 富士山(第五回)白馬岳
- 一九一〇年 白山(加賀)立山、針ノ木峠
- 一九一三年 富士山(第六回)

同師は今日猶健在である。(六月五日の手紙による)

木暮會長の折況

木暮會長の御病氣のことは、御迷惑をかけてはならないといふ我々の心づかひから、會員諸兄にも廣く御知らせ申上げなかつたのですが、實は五月以來神經痛で床につかれ、その頃の不順な天候のため一時はかなりの重態であられたやうですが、其後經過順調で、近所をそるそると散策される姿を拜見し元通りの元氣な姿に殆んど近くなられたやうに見受けられました。もう心配はないやうなもの、御老體ゆへ、御自愛を切に希望して居る次第であります。こんなわけで會員諸兄にも御見舞される向もあらうと考へますが、どうぞ會長の御迷惑にならないやうに願ひたいと存じます。(TK生)



會務報告

六月定例理事會

- 六月十日午後六時本會事務所 出席 松方、横、鳥山、黒田、小島、高頭、木村、茨木、島田、高橋、田口、中司、櫻井(委任)冠、加藤、
- 一、木暮會長病氣見舞ノ件
- 一、研究調査費支出ノ件
- 一、借室ノ件
- 一、ウエストン師壽像原型完成ノ件
- 一、山岳編輯ノ件
- 一、山日記發刊ノ件
- 一、圖書整理ノ件
- 一、會員有志懇談會ノ件

七月定例理事會

七月八日午後六時半本會事務所 出席 横、松方、黒田、高頭、小島、冠、木村、櫻井、西畑、茨木、中司、高橋、島田、佐藤久一郎(會員、レリーフ製作者)(委任)鳥山、ウエストン師レリーフ建設ノ件、山岳三二年一號編輯ノ件

六月十日午後六時本會事務所 出席 松方、横、鳥山、黒田、小島、高頭、木村、茨木、島田、高橋、田口、中司、櫻井(委任)冠、加藤、

一、木暮會長病氣見舞ノ件
一、研究調査費支出ノ件
一、借室ノ件
一、ウエストン師壽像原型完成ノ件
一、山岳編輯ノ件
一、山日記發刊ノ件
一、圖書整理ノ件
一、會員有志懇談會ノ件

七月八日午後六時半本會事務所 出席 横、松方、黒田、高頭、小島、冠、木村、櫻井、西畑、茨木、中司、高橋、島田、佐藤久一郎(會員、レリーフ製作者)(委任)鳥山、ウエストン師レリーフ建設ノ件、山岳三二年一號編輯ノ件

關西支部室の利用は追々その數を増加して本年上半期の數字はおよそ左の通りである。

月別 會員 會員集會 同 回数 人員 合計

一月	四二	二五	二三一	九八
二月	四六	三八	四三九	一二三
三月	五一	三六	一八	九五
四月	四三	二一	二三二	九六
五月	四六	三四	三三二	一一二
六月	七三	二七	二一九	一一九

なほ關西支部室は大阪北區堂ビル筋向ひの大阪貯蓄銀行三階にあり、日曜、祭日を除き毎日午後五時より八時まで開室してゐるのみならず、右時間外において山岳團體集會のため無料貸室の便宜を計てみますから希望の向は豫め御照會下さい。

同室には最近有志會員の協力による圖書新設資金で購へた山岳書が遂次々備を見えますから御遠慮なく利用願ひたいと思ひます。

關西支部學聯懇親晚餐會

昭和十二年七月三日(土)夕刻より大阪堂ビル、清交社別室で開催

晚餐後津田理事をよび學聯OBの前田光雄兩氏司會の下に懇談に入る津田理事より挨拶あり、參會者全部の自己紹介に續て學聯側より日本山岳界に對する希望として、遠征計畫など行はれる昨今山岳意識の水準引

上げの必要なる遠征と行ふには國民の後援及び日本山岳會のごとき大團體の力強い、根本的な組織體の助力によらねば難しい、そのためには日本山岳會と學聯側登山家との緊密なる提携が望ましいと開陳、現在行れてゐる對外遠征研究會のシステムなどの報告あり、石川欣一氏より英文獻に關する協力の申出、西岡一雄氏よりは新しい研究になる裝備に就ては獻身的の製作援助をする旨の力強い後援が現れ、竹節作太氏はヒマラヤ行などにあつては非常に長い平地を暑さと雨に耐へて行進せねばならぬ關係上、内地に於ても夏山を重視すべきであり、又山麓部落の傳染病にも耐へ得る體力が要求されるとの貴重なる經驗談を述べられ討論はやゝ廣範圍に亘り時間の僅少を感じた、なほ「」を指す京大側と日本山岳會との協力問題や。早大のナンガ・バルパット遠征説などにつき意見を交換した、又創期會員林並木氏の登山懷舊談が興味深く披露されるなど新舊岳人うちとけて會談することのできたのは非常に有意義だつた

時間の不足や第一回顔合せでもあり、かつ夏山シーズンを迎へての準備などのため本會合に對する議題の取纏めなどに不充分の點があつたが次回には學聯側より山岳會へ希望事項の具體的の提示があることとなつた

出席者 會員二十二名
金谷簡二、津田周二、富田健一、須

々木勝年、今川良雄、下川友記、西岡一雄、林並木、石川欣一、竹節作太、名古屋常治、中原繁之助、朝輝記太留、柏岡英男、山口季次郎、本出博俊、加藤泰安、竹内佐郎、前田光雄、山中正之助、栗飯原健三、小林善四郎

會員章再交付

會員章紛失の届出ありたるにより左の通り新に交付せり、

會員章番號一七一九(舊一六一七)
京都市聖護院蓮華藏町八

岩見隣太郎
從て舊會員章一六一七號は無効と

なれり。

新着圖書

- ケルン 七、八月號 同 編輯室
- 山小屋 同 朋 文 堂
- 寫眞月報 同 小西六本店
- ツリーリスト同 J・T・B
- 野鳥 同 日本野鳥の會
- 地學雜誌六、七月號 東京地學協會
- 上越の山 日本登高會
- 白馬岳 田邊利雄著 古今 書院
- 臺灣の山と蕃人 著者 田中 蕨
- 針葉樹 第九 東京商大一橋山岳部
- 立教大學山岳部報
- Natural History 6
- Geographical Journal 5-7
- Deutsche Bergwacht 16
- Jahresbericht
- Die Alpen 6-7
- La Montagne 4-6
- The Mountaineer 7-8
- Sierra Club Bulletin 2-3
- Trail & Timberline 5-6
- The Prairie Club Year Book 1937
- Appalachia 6-7
- Revue Alpine (C. A. F. - Section Lyonnais) 311
- Rivista Mensile C. A. I. 5-6
- De Bergids 6-7
- Unione Ligure Escursionisti 5-6
- Planinski Vestnik 6
- Bulletti del C. E. de Catalunya 3-5
- Bulletin du C. A. Tchecoslovaque 4

S. T. F. 5-6

會員寄贈圖書

大屋義人著 信濃觀光讀本
長野縣發行 野尻湖
以上會員 黒日 孝雄氏
購入圖書

H. W. Timan : The Ascent of Nanda Devi.

編輯者より

事變關係で、會員の各位のうちに種々な關係で、かの地にあられて皇國のため大いに奮闘せられてゐる方もあられると存じますが、その方々のためにかげ乍ら御健闘を御祈り申し上げます。今月もおくれて七八月號を一所に出します。悪からず。御覽の通り、ウエストン號といつた形で、リリースも建設の許可に接したので、近日中に取つける運びとなりました。恐らくこの號の出る時分には竣工するでせう。神河内に入られたとき、是非とも、御覽を願ひたいと存じます。(中司)

昭和十二年八月二十六日印刷
昭和十二年八月三十一日發行

發行所 中屋健一
編輯者 中司文夫
東京市小石川區戸崎町一三
印刷所 多木印刷所
東京市芝區榮町一(木二層ビル)
發行所 日本山岳會
電話・芝一六四九番
廣告一手取扱 電話・四谷・六五四番

昭和十二年七月申
(四七九) 松本市信濃鐵道株式會社